

市町村合併による人口と生活圏の変化
－岡山県北部，旧北房町^{ほくぼう}を事例として－

岡崎雄樹・宮本真二

市町村合併による人口と生活圏の変化

— 岡山県北部，旧北房町^{ほくぼう}を事例として —

岡 崎 雄 樹 ・ 宮 本 真 二

— 論 文 要 旨 —

市町村合併により岡山県内で最大の面積となった真庭市に注目し，旧北房町の上砦部，宮地，上中津井の各3地域の合併による生活圏，人口変化について検討した。

その結果，上砦部と宮地では真庭側に生活圏が形成されており，集落そのものの生活基盤は維持されていた。その一方で，上中津井では，歴史的関わりのある高梁側にも生活圏が形成されており，南側から少子化が進んでいた。したがって，合併は住民の生活行動圏に沿った範囲で行うのが理想的であるが，生活圏域よりも行政区域の方が大きくなると，人口減少の影響が深刻化することが示唆された。

1. はじめに

本研究では、広域市町村合併によって生じたと考えられる課題を検討する。このような課題に着目した研究群において、社会学の立場からは、広域合併による行政サービスの拡充メリットが指摘されている（築山、2013）。しかしその一方で、一部の地域では「少子」型過疎から「高齢者減少」型過疎へと変化し過疎化がさらに深刻化しているとの問題も指摘されている（山本・高野、2013）。

つぎに地理学の立場からは、中国地方の中山間地域を、①中心小都市型、②近郊混住化型、③農林業展開型、④中山間疎住型、⑤工業集積型、⑥島嶼・漁村型に分類し、異なる地域の現状と、その課題について提示されている（星野、1996）。また、近年では通勤先の地域にあるスーパーにまで購買圏が拡大したこと、利用範囲や所要時間といった生活行動圏に変化がみられるようになったこと（三橋、2000）や、医療圏に関しては、軽症時では町内利用または30分以内が主であり、重症時では隣接・中枢都市利用または60分以内が主である（藍沢、1983）と述べられている。しかし、いずれも公共交通機関に依存せざるを得ない「交通貧困階層」の住民にとっては、必ずしもそれらが該当するとは言いきれず、地域ごとの状況によって日常生活圏は相違していることが指摘されている（藍沢、1983）。

以上のことをふまえ、本研究では広域市町村合併によって岡山県内で最大の面積となった真庭市に注目し、その結果生じた問題の一端を明らかにしたい。具体的には、①合併によって変化した生活圏、そして②人口変化についてそれぞれ考察し、その特徴について明らかにすることを目的とする。

2. 対象地域の概観

平成22（2010）年の国勢調査によると、真庭市は岡山県北部に位置し、面積は828km²と県内最大の面積を誇り、人口は48,964人で、高齢化率は33.6%の中山間地域である。南部には吉備高原が広がり、水田地帯が形成されている（図1）。一方、北部では蒜山高原が広がり、気候は寒冷で酪農が主幹産業であり、南北に広くそれぞれ環境が異なっている。平成17（2005）年には真庭郡落合町、久世町、勝山町、湯原町、美甘村、川上村、中和村、八束村と上房郡北房町の9町村が新設合併を行い、真庭市が誕生した。だが、合併以前から勝山、久世、落合は、それぞれ中心小都市的な存在であったことから、合併直後は市庁舎をその3カ所に設ける分庁方式を採用し、勝山に本庁舎を設置していた。しかし、平成

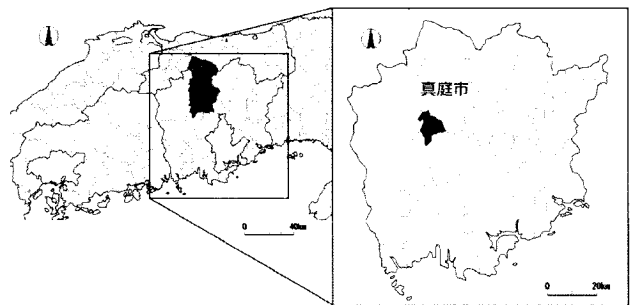


図1 真庭市、旧北房町の位置

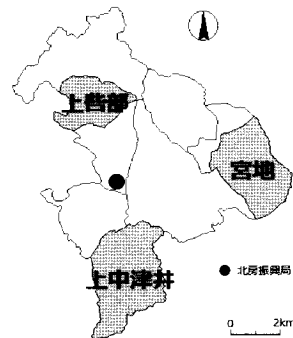


図2 真庭市、旧北房町の対象地域

23（2011）年、久世に新庁舎が完成したのと同時に、行政の中心は勝山から久世へと移行した。現在は勝山、落合、北房、湯原、美甘、蒜山振興局と川上、中和出張所がそれぞれ設置されている。

そのなかでも本研究の対象地域である北房町は、平成22（2010）年の国勢調査によると真庭市の南西端部に位置する旧町名で、面積は71.18km²、人口は5,558人（H22国勢調査）で、高齢化率は35.0%と、真庭市全体の値よりも高い「中山間地域」である（図2）。周囲を450～600m程度の山々に囲まれた水田地帯が形成されており、歴史的にも備中と美作とを結ぶ交通の要所であるが、鉄道は通っていない（北房町史編集委員会、1992）。旧北房町は、皆部、中津井、上水田、水田の4地区で構成されており、かつては全域が備中松山藩領となっていたが、その後備中松山藩や新見藩、幕府領などにそれぞれ分割された。明治以降は、4地区全てがそれぞれ行政村を形成したうえ、新見を中心とした阿賀郡に属していた。その後、明治33年には高粱を中心とした上房郡へと分割編入され、備中圏域に属していた。しかし、平成17（2005）年の合併では住民投票により真庭市となり、美作圏域へと移行した。

(1) 上皆部

平成22（2010）年の国勢調査によると（表1）、真庭市南西部の皆部地区の上皆部は、北房盆地北端部に位置し、人口206人と旧北房町内では最も人口が少ない地域

である。合併後人口減少率が大きくなり、子どもの割合も8.7%と最も低くなった。しかし、平成27（2015）年の住基データによると、人口が微増したほか、同じ砦部地区の阿口を抜いて順位を1つ上げることとなった。

県道58号線以外に主要な幹線道路は整備されておらず、商店や医院もない当地域には、4つの集落が点在しているほか、昭和32（1957）年に新見市から分割編入された坂尻集落を有しており、稲作やピオーネといった農業が主要産業となっている。また、江戸時代には廃藩置県までの174年間、新見藩領の領地であった（北房町史編集委員会、1992）。

(2) 宮地

平成22（2010）年の国勢調査によると、真庭市南部の水田地区の宮地は、人口784人で、高齢化率は29.5%と旧北房町内では、同じ水田地区の五名に次いで2番目に低くなっている。また、子どもの割合は14.7%と最も高くなっている。

国道313号線や岡山道などが整備されており、隣接している真庭市旧落合町と当地域には、15の集落と3つの団地のほか、商店や個人医院、各種事業所、小学校などを有している。また、江戸時代には幕府領や津山藩などの領地であった（北房町史編集委員会、1992）。

(3) 上中津井

真庭市南西端部に位置する中津井地区の上中津井は、

表1 大字別の人口変化 (人)

	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年
下砦部	1,202	1,122	1,030	931	886
上砦部	289	271	222	206	239
阿口	332	302	272	245	218
上水田	1,756	1,601	1,583	1,513	1,554
宮地	923	885	808	784	794
山田	380	363	331	305	314
五名	345	351	335	324	289
上中津井	735	694	648	598	553
下中津井	733	735	717	652	635
北房町	6,695	6,324	5,946	5,558	5,482

(資料：国勢調査)

*H27のみ平成27年9月30日現在の住民基本台帳データ

表2 アンケート回収結果

	世帯数	回答数	回収率 (%)
上砦部	67	44	65.7
宮地	233	125	53.7
上中津井	148	73	49.3
合計	448	242	54.0

*世帯数：回覧板配布軒数（平成27（2015）年8月現在）

平成22（2010）年の国勢調査によると、人口598人で、高齢化率は43.3%と旧北房町内では、砦部地区の阿口に次いで高くなっている。

国道313号線が通っており、隣接している高梁市旧有漢町とトンネルにより繋がっている当地域には、6つの集落が点在し、農業や畜産といった第1次産業が主な産業となっている。また、江戸時代には備中松山藩や伊勢亀山藩の領地であった（北房町史編集委員会、1992）。

3. 方法

上述した上砦部、宮地、上中津井地域の全世帯を対象に、以下の調査項目に関する無記名アンケート調査を平成27（2015）年8月4日～8月12日、8月24日～9月4日の期間で実施した。その際、住民を対象に真庭市との合併の是非などのヒアリング調査も行い、そこから得られたデータや情報を地域ごとにそれぞれ集計した（表2）。

調査項目

- ・回答者の属性（多肢選択）
 - 年齢、性別、居住地、職業、世帯構成、運転免許証
- ・商圏について（多肢選択）
 - 地域名、移動手段、利用頻度
- ・医療圏について（多肢選択）
 - 地域名、移動手段、利用頻度
- ・コミュニティバスについて
 - 利用頻度、目的
- ・真庭市との合併について
 - 買い物先・通院先の変更、真庭側との交流、合併の是非
- ・通勤圏について（多肢選択）
 - 職種、地域名、移動手段
- ・地域間の移動について

4. 結果

今回の調査では、3地域とも世帯構成の割合はほぼ同じであった。また、運転免許証の保有率は8～9割と高く、移動手段として自家用車を利用する人も8～9割と高いことから、コミュニティバスや公共バスを利用する人は少なかった。また今回、合併による生活圏の変化はほとんどみられなかった（表3～7）。

(1) 上砦部

食料品・日用品は、旧北房町内の利用が多く、食料品・日用品以外では、真庭市旧落合町、旧久世町の利用が多いことから約25km圏内に商圏を形成していた（表

表3 食料品・日用品の買い物先

(%)

	真庭市	高梁市	津山市	新見市	岡山市	倉敷市	その他	無回答
上哲部	97.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.3	0.0
宮地	99.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8
上中津井	90.4	6.8	0.0	0.0	0.0	0.0	1.4	1.4

	北房	落合	久世	勝山	湯原
上哲部	71.4	16.7	9.6	0.0	0.0
宮地	69.4	16.6	11.4	1.8	0.0
上中津井	69.8	12.0	8.6	0.0	0.0

表4 食料品・日用品以外の買い物先

(%)

	真庭市	高梁市	津山市	新見市	岡山市	倉敷市	その他	無回答
上哲部	79.5	2.3	4.5	0.0	6.8	6.8	0.0	0.0
宮地	75.8	2.3	7.0	0.0	4.7	5.5	0.0	4.7
上中津井	69.9	16.4	2.7	0.0	5.5	5.5	0.0	0.0

	北房	落合	久世	勝山	湯原
上哲部	25.9	15.3	38.3	0.0	0.0
宮地	21.7	23.3	28.3	2.5	0.0
上中津井	22.7	20.5	26.7	0.0	0.0

表5 通院先

(%)

	真庭市	高梁市	津山市	新見市	岡山市	倉敷市	その他	無回答
上哲部	86.4	0.0	0.0	0.0	6.8	2.3	2.3	2.3
宮地	95.2	0.8	0.0	0.8	2.4	0.8	0.0	0.0
上中津井	84.9	1.4	0.0	0.0	1.4	5.5	1.4	5.5

	北房	落合	久世	勝山	湯原
上哲部	34.2	49.5	2.7	0.0	0.0
宮地	38.6	55.4	0.0	0.9	0.0
上中津井	53.0	31.9	0.0	0.0	0.0

表6 通勤先

(%)

	真庭市	高梁市	津山市	新見市	岡山市	倉敷市	その他	無回答
上哲部	68.6	2.9	5.7	2.9	0.0	0.0	0.0	20.0
宮地	63.8	4.9	1.0	1.0	1.0	0.0	3.9	24.5
上中津井	49.1	9.1	1.8	3.6	1.8	0.0	1.8	32.7

	北房	落合	久世	勝山	湯原
上哲部	54.3	10.7	3.6	0.0	0.0
宮地	47.1	10.8	4.9	1.0	0.0
上中津井	40.0	6.8	0.0	0.0	2.3

表7 合併の評価

(%)

	満足	まあまあ	不満	わからない
上哲部	15.9	43.2	15.9	25.0
宮地	14.4	44.8	18.4	22.4
上中津井	2.7	45.2	35.6	16.4

3～7)。また通院先では、落合の利用が多く約20km圏内に医療圏が形成されていた。通勤先については、北房が5割以上を占めているほか、真庭市や津山市、高梁市などに通勤圏が形成されていた。合併の評価については、歴史的な関わりのある高梁市と比較しながら検討した。

地域間の移動に関しては、落合や高梁市、岡山市など岡山県内への転出が多くみられ、そのほとんどが結婚による転出であった。また当地域では60代の割合が高く、世帯構成に関しては、独居世帯が約14%で、空き家率は約9%となっていた。

(2) 宮地

食料品・日用品は、旧北房町内の利用が多く、食料品・日用品以外では、真庭市旧落合町、旧久世町の利用が多いことから、当地域の商圏は10～20km圏以内となっていた。通院先に関しては、落合の利用が多く医療圏は約10km圏内となっていた。また通勤先については、北房以外にも岡山市や吉備中央町、美咲町など県内各地に通勤圏が形成されていた。また当地域では、対象地域で唯一、真庭市旧勝山町の利用も少しみられた。

地域間の移動に関しては、落合や倉敷市、岡山市などの岡山県内への転出が多くみられ、合併後は進学を理由に、合併5年後からは仕事を理由に転出していた。また、空き家率は約12%となっていた。

(3) 上中津井

食料品・日用品は、旧北房町内の利用が多く、食料品・日用品以外では、真庭側側の利用が多かったが、高梁側側の利用もみられたことから商圏は約25km圏内となっていた。通院先に関しては、北房の利用が多かったが、商圏とは異なり高梁側側への利用はほとんどみられず、医療圏は10～20km圏内に形成されていた。通勤先については、真庭市や北房の割合が対象地域のなかで低く、その一方で、高梁市の割合が高くなっていた。

地域間の移動に関しては、岡山市や浅口市などの岡山県南部や、東京や神戸などの県外への転出が目立っていた。また、空き家率は約13%となっていた。

5. 考察

(1) 合併への住民の評価

昭和の合併時、上中津井を含む中津井地区では高梁側を、宮地を含む水田地区では真庭側を支持していた(横上, 1959)。この状況は平成の合併時でもほとんど変わらず、合併から10年が経過した現在でも、両地域の対立は続いている。とくに上中津井では、真庭側に生活圏を形成している人が多くいたのにもかかわらず、真庭市と

の合併に不満を抱く人が多くいたことから、平成の合併では、生活面よりも歴史的関係を優先していた。しかし、上中津井では新見、高梁、真庭との関係が時代とともに変化しているとみられることから、歴史的関係よりも生活面を重視していると推察される。

(2) 生活圏の変化

上中津井と宮地では、通勤圏と商圏・医療圏とが一致していることは、今回の調査では確認できなかった。また上記の両地域における「高梁」は、生活行動における選択肢のひとつであった。このことから、上中津井と宮地の生活圏はほぼ類似していた。その一方で、上中津井では通勤圏と商圏・医療圏とがほぼ一致していた。だが、既存の生活行動圏調査(岡山経済研究所, 2001・2004)や今回の調査結果から、現在、旧北房町の商圏の中心は次第に真庭市旧落合町から旧久世町へと移行しつつある。今後久世商圏へと変化した場合、上中津井では高梁市中心部の方が近くなることから、再び高梁商圏が復活するか、生活圏の拠点が遠くなることにより、人口減少がさらに加速することが予想される。さらに、旧北房町では備中、真庭両圏域に行政機関などが位置しているため、合併後は行政上の管轄区域が生活圏域よりも大きくなり、住民を困惑させた一面もあったことが付記されている。

(3) 人口変化

上中津井で空き家率が約9%と、対象地域のなかで最も低かった要因のひとつとして、「跡継ぎ」の意識によるUターン者が多いと考えられる。そのため当地域では少子高齢化が懸念されるが、空き家が増加する可能性は現段階ではない。したがって、今後も集落は維持され、消滅集落になる可能性は現時点では低い。また宮地では転出理由として、進学から仕事等にその要因が変化していることから、今後は仕事による県内転出が多くなると思われる。さらに、団地が立地していることによって、当地域では年齢層のバランスが保たれており、集落機能が維持されている。だが、上中津井では県南、県外への転出が顕著であることから、Uターンによる転入は期待できない。さらに付記することとして、合併によって真庭市になったことや、高梁市に隣接している南側から少子化が進展していることもあり、「限界集落化」が懸念される。

6. おわりに

本研究では、合併以前の旧地域ごとに合併の影響が異なっていた。また、対象地域では生活面を重視した地域のほかにも、歴史的関係を重視した地域もあり、これら

の違いが合併後、それぞれの地域の人口変化に影響を及ぼしたとみられる。これらが直接的な要因とするのは難しいが、合併は住民の生活行動圏に沿った範囲で行うのが理想的ではないかと判断した。しかし、近年の広域行政等の影響により、生活圏域よりも行政区域の方が大きくなるといった状況もまた、人口減少の要因のひとつではないかと考えられ、今後の行政の取り組みについて注目したい。

【付記】

本研究は、第1著者の岡崎が平成27(2015)年度・岡山理科大学・生物地球学部の卒業研究で実施した研究成果の一部であり、その内容を第2著者の宮本が大幅に加筆・修正した。

現地調査において、住民の方々はじめ関係行政機関の皆様、地理学研究室のゼミ生、さらに、地理・考古学コースの関係各位に厚くお礼申し上げます。

なお、本研究の研究経費の一部として、科研費(課題番号:25370929, 研究代表者:宮本真二)の一部を使用した。

末筆ながら本研究を、めでたく還暦をお迎えになりました白石 純先生に謹呈させていただきます。

文献

- 藍沢宏(1983)農村集落における生活圏の設定と生活関連施設の配置に関する研究, 農村計画学会誌, 1, 4, 27-38。
- 岡山経済研究所編(2001)『岡山県民の生活行動圏 第9回調査結果報告書』, 岡山経済研究所。
- 岡山経済研究所編(2004)『岡山県民の生活行動圏 第10回調査結果報告書』, 岡山経済研究所。
- 築山秀夫(2013)市町村合併と農山村の変動-長野県旧大岡村を事例として-, 年報村落社会研究, 49, 155-195。
- 北房町史編集委員会編(1992)『北房町史 通史編上』, 北房町。
- 星野敏(1996)中国中山間地域における地域構造類型と地域活性化の基本方向, 農林業問題研究, 32, 1, 13-23。
- 三橋伸夫(2000)農村地域の生活圏の再構成, 農村計画学会誌, 18, 2, 98-101。
- 山本努, 高野和良(2013)過疎の新しい段階と地域生活構造の変容-市町村合併前後の大分県中津江村調査から-, 年報村落社会研究, 49, 81-114。

【岡崎雄樹:〒700-0005 岡山市北区理大町1-1
岡山理科大学生物地球学部生物地球学科】

【連絡著者:宮本真二 〒700-0005 岡山市北区理大町1-1
岡山理科大学生物地球学部生物地球学科
地理・考古学コース地理学研究室
E-mail: miyamoto@big.ous.ac.jp】